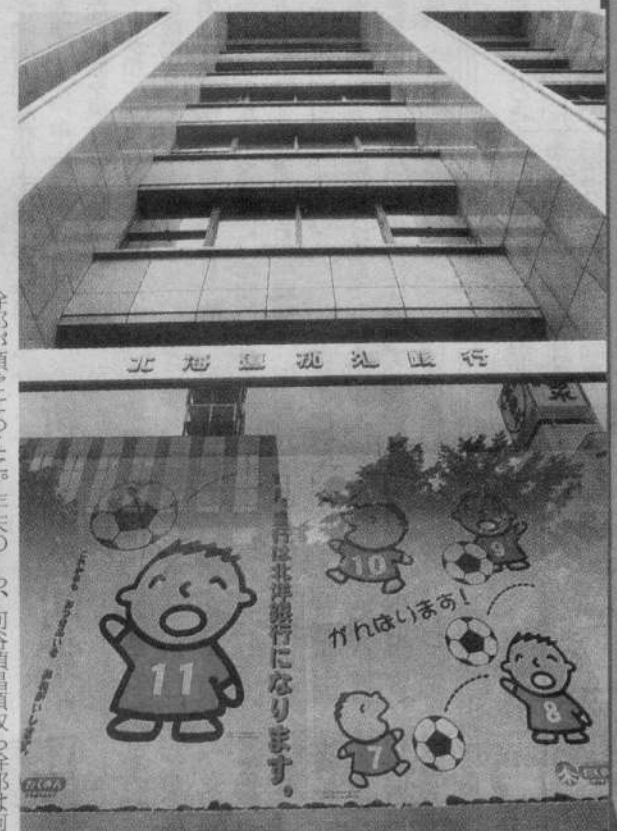


検証証

拓銀 崩壊

<1> 10.10.6



本店

かつて拓光ボードは、二万八千円割れ響く。「まずい。また預金がかつても寸前の平均株価を表示。銀行流出する！」

ほろ酔いかげんで帰宅した河谷は、玄関先で待っていた記者から質問を突き付けられた。

「そんな、何もありませんに飛び火した。機関投資家など何かあるなら酒なんか飲んど大口預金者の解約が始まっていられないよ。頭取の私に言ってるんだから」。笑顔で絶やさぬ河谷が、珍しく色気ばんだ。

巨額の不良債権、低い格付など、バブル崩壊の後遺症から、経営危機説や合併説が止り落ちるんだ。

「それは北洋銀行になりました。」

「そんな、何もありませんに飛び火した。機関投資家など何かあるなら酒なんか飲んど大口預金者の解約が始まっていられないよ。頭取の私に言ってるんだから」。笑顔で絶やさぬ河谷が、珍しく色気ばんだ。

「そんな、何もありませんに飛び火した。機関投資家など何かあるなら酒なんか飲んど大口預金者の解約が始まっていられないよ。頭取の私に言ってるんだから」。笑顔で絶やさぬ河谷が、珍しく色気ばんだ。

「そんな、何もありませんに飛び火した。機関投資家など何かあるなら酒なんか飲んど大口預金者の解約が始まっていられないよ。頭取の私に言ってるんだから」。笑顔で絶やさぬ河谷が、珍しく色気ばんだ。

「そんな、何もありませんに飛び火した。機関投資家など何かあるなら酒なんか飲んど大口預金者の解約が始まっていられないよ。頭取の私に言ってるんだから」。笑顔で絶やさぬ河谷が、珍しく色気ばんだ。

足音

時計の針が午前零時を回った。テレビのアナウンサーが興奮した声で、サッカーワールドカップ(W杯)アジア第三代表決定戦での日本代表の劇的な勝利を伝えていた。だが、前日の深夜から北海道新聞本社六階の編集局は、別の異様な緊張感に包まれていた。新聞休刊日で朝刊はないが、記者たちが次々と姿を現す。電話があちこちで鳴り響き、大声が飛び交う。「いよいよか」

重苦しい夜が明けた。テレビとラジオが一斉に臨時ニュースを流し始め、北海道新聞の号外が街角で配られた。「拓銀破たん」の大見出し。一九九七年十一月十七日、北海道を揺さぶり、日本の金融不安の引き金となる「Xデー」がついに現実となったのだ。

預金流出不安の連鎖

いま振り返ると、あれは拓銀にとって「最後の宴(うた)」だったのかも知れない。高は目標の七兆円を突破し、九六年も押し迫った十二月二十七日、拓銀本店五階の小会議室に、部長以上の本店

周囲には、すでに不穏な雰囲気が流れていた。「三十日の大納会後に拓銀が何か発表する」という話が出てくるんですが。打ち上げ式前日の午後十時すぎ、日、東京証券取引所の大型電

「株価からみると、実質的に破たんしてます」

「破たんしてはいいけど、拓銀であることは明らか。破たんする。頭の中が真っ白は迷走の軌跡を検証する。」

「拓銀問題取材班」